

山本八重から新島八重へ

私らしく生きる (前編)

二七回生 林 裕三

アメリカから帰国し、両親と再会した1874年(明治7)11月29日から5ヶ月しか経っていない1875年(明治8)4月頃、新島襄は同志社英学校を設立すべく京都府権参事(今の副知事)であった榎村正直と協議した時、彼から「君は細君を日本人から迎えるか、外国人から迎えるか」と尋ねられ、「日本の婦人を娶りたいが、亭主が東を向けと命令すれば、3年でも東を向いているような東洋風の婦人は御免です」と答えたところ、「それなら適当な婦人がいる。今、女紅場に奉職している山本寛馬(榎村の下で府顧問)の妹で、度々私のところへ来るが、その都度、学校の事について、色々難しい問題を出して私を困らせている。どうだ、この娘と結婚しないか。仲人は私がしてあげよう」との趣旨で襄に八重との結婚を勧めたようである。八重の回想録に記載されているのだから襄が後日、八重

に話したのだろう。このことからわかるように、八重は権知事であっても遠慮しないで、思ったことを直ぐ進言する女だったのである。

しばらくして、新島が学校設立の話をするため山本寛馬の家を訪ねると八重が京都は暑かったのか井戸の上に板を置いて縫い物をしていたのを見つけ、「妹さん危ないですよ。すぐ止めさせないと」と声高に言うと言っただけだったとのことであった。

このことがあって新島は八重に興味を持ち始め、4ヵ月後の10月二人は結婚してしまっている。新島は余程嬉しかったのかアメリカで資金援助してくれたハーディー婦人に手紙を出している。婚約の報告、知事への陳情のことおよび自分と婚約したことにより解雇されたことなど細かく報告している。少し長いが必要部分のみ記す。

「(前略) 確かこの前の手紙で目の不自由な人『山本寛馬』について興味深い話をお伝えしたと思いますが、この人の妹『山本八重』と婚約しました。(中略) この嬉しい出来事があつた直ぐ後に、彼女が4年間勤務していた京都府立の女学校(女紅場)を解雇されました。

したのだが、この30年前に戻そう。

(中略) 彼女は幾分目の不自由な兄に似ています。あることをなすことが自分の務めだと確信すると、もう誰も恐れません。彼女は、自分が勤めていた女学校に補助金をもらうためにこれまで何度も知事に直接陳情に行っています。が、女学校の幹部らは知事を恐れてそのようなことは言えないでいました。(中略) 先日彼女は『いいのよ、これで福音の真理を学ぶ時間がもつと取れるわ』と言っていました。

ほんの数日前に撮った写真を同封します。彼女決して美人ではありません。しかし、私が彼女について知っていることは、美しい行いをする人だと言うことです。私にはそれで十分です。(後略)

原文は “She is not handsome at all. But what I know of her is that she is a person who does handsome. It is just enough for me.” となつてゐる。しかし “at all” とは八重にとっては失礼な話であるが・・・このことを知ったNHKは大河ドラマの主人公にするに当たり、八重のことをハムサムウーマンとキャッチフレーズを考えたようである。

初めに八重の性格を知って頂くことと「ハンサムウーマン」の話をするために新島との婚約前後の話を

山本八重は1845年(弘化2)12月1日、会津藩で代々砲術師範を務める山本権八と佐久の三女として鶴ヶ城の近くに生まれる。母親の佐久はいち早く子供に痘瘡の種痘を接種させるなど他の婦人にも勧めたと言う。もともと会津藩は他の藩に先駆けて1853年(嘉永6)に種痘に取組んだが、藩主容保の正室敏姫は侍医の反対により接種されず、後年流行った痘瘡で亡くなる。佐久の進言を受け入れ接種した者はすべて無事であった。佐久の聡明さは兄の寛馬も「母親には勝てない」と言っていたようだ。

八重の話を戻そう。八重は幼い頃から男勝りで、13歳の頃には四斗俵を肩の上まで4回は上げ下げ出来たと言うのだから相当な力持ちである。

藩の砲術師範でもあった17歳上の兄の寛馬から射撃や砲術を学んだ八重は隣の伊藤家の子供に砲術を指南する。この少年は飯盛山で切腹した白虎隊十九士の一人伊藤悌次郎である。後年そのことを聞いた八重は自分が教えなかったら良かったと後悔はしたそうであるが砲術を教えようが関係なく、悌次郎は白虎隊

に入つて自刃したと言うのが通説である。



図 1. 当時の山本家の地図（米代四ノ丁）

八重は余り裁縫が得意でなく、でも自覚はあったよ
うで、17歳になっても、裏の日向家のユキとは10
歳も違うのに、一緒に習っていたと言うから、自分が

究もしていた。八重の9歳上ということもあって心
安く砲術なども教えてもらっていたと思われる。

1862年（文久2）藩主松平容保は家老たちの反對を「藩祖 正之公の家訓『会津藩は徳川宗家に忠勤を尽くすべし』を楯に、藩士を説得し 京都守護職の命を受け、覚馬も上洛する。京では天誅と称する人斬りが絶えなく、治安維持のため、何かと子供時代から競争していた八重と同じ年の家老の孫 山川大蔵も上洛し新選組が会津藩お預かりとなった。こんな時でも覚馬は日本の国防について動かぬ砲台よりも大砲を備えた戦艦を造るなどとの『守四門両戸之策』をまとめ、藩主に提出しながらも 現存する 西洞院上長者町上ルの長徳寺を借りて洋学校も開いて諸藩士に教授する。

長州の動きが怪しいと見ていた新選組は1864年（文久4）6月5日三条小橋の池田屋旅館を急襲し、二十余名殺害、7月11日上洛していた佐久間象山が帰宅途中、木屋町で何者かに暗殺される。覚馬は一番に駆け付ける。三条大橋に揚げられた立て札には「会津と謀り天皇を遷座させようと企てたので天誅を加える」と書かれていた。これは象山から覚馬が相談を受

必要だと思ふことは、恥ずかしくても学んでいたのである。この日向ユキと高木のお祖母さんの孫の時尾とは大の仲良しで、八重になつてゐた。後年、時尾は京都で鳥羽伏見の戦いで破れて会津に来て、戊辰戦争に加わつたあの新選組の組長であつた斉藤一と結婚する。また日向ユキとは晩年再会している。洋学・砲術など佐久間象山塾などで勝海舟、武田斐三郎、後の吉田松陰、江川太郎左衛門などそうたる人物と3年間学んできた兄覚馬は1856年(安政3)江戸から戻り、藩校日新館の教授になつた。当時の会津藩は槍刀が主流で鉄砲と言つても火縄銃である。雨天では使えない火縄銃を廃止し洋式銃を採用する砲術など兵制の改革を唱へ過ぎた為、禁足を食らう。しかし、時代がそのことを許さなくなり、その暮れには大砲頭取に抜擢された。

覚馬と江戸で学んだ出石藩 洋学者 川崎正之助が
1857年(安政4)覚馬の要請により 山本家の居候
となる。覚馬は正之助を藩士になるよう力を注いだが
藩は認めず、本人の申し出により、日新館の指導分の
わずかな手当てだけで十分だと言うことになった。正
之助は日新館の蘭学所の教授を務めながら 砲術の研

けていたことである。京の町はますます喧騒としてきた。池田屋事件以降、会津が逆転してきたことに危機感を感じて持った長州は7月19日禁門に迫つて来た。これに對し会津の覺馬らは砲兵隊を率いて参戦する。長州部隊は塀の高い高司邸に立てこもつたのでやむなく、覺馬は土塀を巨砲で破つた。久坂玄端らが戦死した(御門の変)。このときの働きで、覺馬は公用人に取り立てられた。また、この政変後、大砲の必要性を理解した会津在京幹部たちも川崎正之助にも1回上洛の要請したが、本国側は藩士でないということでこの要請を断つたところ、翌年1865年(文久5)藩士と認められ、名が藩祖の正之に結びつく正之助から尚之助に改名した。その上、その期に仲良く鉄砲の改良に従事していた八重と尚之助は結婚した。この辺りどうも兄覺馬の意向があつたように思えてならない。

一方寛馬は、勝海舟から象山の遺児 佐久間格二郎の世話を頼まれ新選組隊長近藤勇に預けるなどしていた（その後格二郎は新選組の中で評判が悪かったのか除隊した）し、藩命により海舟と時勢について相談もしている。しかし禁門の変における大砲の硝煙を浴びたゆえか 視力が日増しに衰えていく。兵制軍器の改

革の必要性を感じた会津藩は、覚馬を表向きは若い藩士の長崎遊学同行だが、主たる目的は武器調達と情報収集のため、1866年（慶応2）長崎行きを命ずる。覚馬の個人的な目的は目の治療であった。

長崎に着いた覚馬はオランダ軍医ボードインに診て貰ったが、覚馬の病状は進んでいった。失明は時間の問題だと告げられる。嘆いていては何も出来ない。ボードインを通じて外国人とも幅広く交友しドイツ商人レーマンを通じて武器購入の契約をした。千三百挺と言う記載もあるが、山川大蔵の弟健次郎の記述では「会津藩の当時の財政事情ではとても購入できる数量ではない」と記載している。

長崎から帰った覚馬の目を気にした上司である大砲奉行の林権助の勧めで、後に結婚する14歳の時米の世話になることにした。

一方、会津の知らないところで、土佐藩を脱藩した坂本竜馬の斡旋によりと言われている薩長同盟が二本松薩摩藩邸（現同志社今出川校舎の一部）にて協議が進んで、成立したのは近くの家老職の小松帯刀の寓居と言われている。この薩長同盟に密かに加わった板垣退助の動きを知った土佐藩は大政奉還建白を新たに

息を引き取る。

私事ながら、筆者の祖父の父および長兄も伏見奉行所に勤務していた同心であった。戦いに敗れ、祖父谷田貝金三郎は10歳で京都五条烏丸にあった林商店に丁稚奉公させられた。伏見から京都の市中まで大八車で来たと言われている。努力したからか、林家に婿入りし、林商店を引き継いだ祖父は谷田貝家を再興すべく三男に継がせた。谷田貝の伯父の家には罪人の捕らえ方などの手引綴があったのを覚えていた。

新政府軍が有利と見た各藩、土佐藩は4日に、このとき錦旗がひるがえり、淀藩、津藩は6日に新政府軍に加わり、旧幕府軍は大坂に退却、慶喜は密かに容保、京都所司代の桑名藩主松平定敬、それに筆頭老中である新島襄の安中藩の宗家である備中松山藩主板倉勝静他と大坂城を脱出し、軍艦開陽丸で江戸に帰った。一般的には「慶喜は江戸に逃げた」と言われるが、容保や定敬を置いておくと必ず戦争が拡大すると判断したのだらう。元々水戸の出身の慶喜である、朝廷を敵にすることを好まなかったと判断すべきだろう。ただ、武士として美しかったかは別である。

戦場に置き去りにされた会津藩士達は江戸に戻り

將軍になった徳川慶喜に提出し、慶喜はそれに乗り、1867年（慶応3）10月14日大政奉還の上表を提出した。今後のことは諸侯会議にて決すると言うことなので慶喜の権力の維持が出来ると考えたのだ。それを嫌った倒幕派は12月9日王政復古の偽勅に近い蜜勅を出させた。覚馬、秋口悌次郎、神保修理ら非戦派は藩内をまとめ様としたが大勢は主戦論に傾いていた。佐幕派と倒幕派は二条城と御所で睨み合いをしていたが、危険を感じた慶喜は容保を伴って12日夜大坂に下った。当然、会津藩も大坂へ下ったが、目が不自由な覚馬は京都に留まった。

薩摩の挑発が江戸でも勃発し、やむなく翌年1868年（慶応4）1月2日会津桑名を中心とする旧幕府軍を京都へ出陣させた。会津を悲劇と導く戊辰戦争の発端「鳥羽・伏見の戦い」が翌3日始まった。林権助率いる会津藩は伏見奉行所付近で御香宮に陣取った薩摩に対峙した。ここには八重の弟三郎もいただろう。数の上では圧倒的に有利な旧幕府軍も新式の大砲、鉄砲には敵わなかった。御香宮に設置した大砲の連発で勝負は決まったと言う。林権助は重傷し江戸へ帰る船中で絶命、三郎も銃弾をあび重傷、江戸新銭座藩邸で

怒りを藩主や重臣に爆発させた。京で外交官にあたる公用方として他藩と交流し容保に仕えた神保修理は慶喜、容保に恭順を進言したとして、神保に非難集中し、容保もやむなく切腹を命じた。

一方、覚馬は鳥羽伏見の戦いが始まると同時に恭順を藩主容保に進言すべく、大坂へ行こうとするが途中で薩摩軍に門人野沢雞一と共に捕らえられる。捕まったのが蛤御門の変で一緒に戦った薩摩藩だったのが幸いした。

幽閉されたのは二本松の薩摩藩邸である。それが後に覚馬の所有物となり、同志社が創設されるのだから面白い。他藩士にも門を開けた洋学校が幸いしたかも知れない。「山本先生」と大事にされたのだらう。紋付の差し入れとか、毎晩酒が出たとの話もあり、客人扱いだった。そこで1868年（慶応4）、野沢雞一に口述筆記させた管の中から見た狭い考えであると謙った「管見」建白書を作成し、薩摩藩に提出する。内容は政体として立憲君主制、国会は二院制、官吏は世襲制を廃止し能力主義で登用、「鉄は国家成り」と言う製鉄の充実を掲げている。また遺産相続は平等、女子教育の充実など封建制を廃止し国民を優先する思想が流れる

ている。

同じ頃、江戸では西郷隆盛と勝海舟の会談により江戸城無血開城が決定し、新選組など幕府軍の不満武士たちは江戸を追いやられ北上した。一方ふるさとの会津は重苦しい空気に包まれていた。慶喜の命令と言え、家臣たちを置き去りにしたまま江戸に引上げたことを容保は深く恥じていたに違いない。

ここで松平容保の兄弟について触れたい。彼はいわゆる高須四兄弟の一人である。美濃高須藩十二代藩主松平義建は息子が多く幕末期に活躍した。次男は尾張藩主徳川慶勝で正室の子であり、母は水戸尊皇攘夷派の徳川斉昭の姉である。したがって、第一次長州征伐のとき家老三人を切腹させて一戦も交えず、引上げて来た総督であり、鳥羽伏見の戦いの折り、藩論を勤皇に統一し、東海道筋諸藩を新政府軍に付かせたのも理解できる。もう一つ話を飛ばすと、新島襄が在米中、岩倉使節団の通訳として欧米の教育施設を案内した文部理事官田中不二麿は元尾張藩士で若いとき勤皇派の慶勝を藩主に迎えるべく運動し、藩主となった慶勝の右腕となり、王政復古時の、慶喜さえ出席出来なかった小御所会議に尾張藩代表として出席している。高須

四兄弟の話に戻って、五男は高須藩十一代藩主・松平義比となった後、尾張藩第十五代藩主・徳川茂徳になりさらに一橋家当主・二橋茂栄となった。七男はご存知京都守護職・会津藩主・松平容保である。九男は京都所司代・桑名藩主・松平定敬である。この方が一番気の毒、兄容保と共に京都の警護に付き、鳥羽伏見の戦い後、桑名の地元藩士は尾張藩の影響からか恭順したが、藩主と一部藩士が越後・柏崎、会津、函館・五稜郭と転戦し、上海まで行っている。藩士に顔向けできないとして帰れなかったのか、意地を示したか、どちらだろうか。

慶喜が謹慎し、幕府が恭順した以上、会津藩が戦う理由もなくなった。容保は恭順の意を示す嘆願書を各藩に送り工作する一方、交戦の準備もせねばならなかった。若くして筆頭家老になった梶原平馬は奥羽越列藩同盟の結成に走り回っていた。京都守護職として忠勤を励みながら、朝敵にされ、薩長だけでなく幕府にも裏切られたのである。海軍副総裁榎本武揚、長岡藩家老らと会合を重ねてきたのである。平馬の考えは薩長の新政府打ち倒し新たな政権を樹立すると言うものだった。覚馬が購入したと言う武器も薩長に取られたと言う話があり、新たに長岡藩と共に武器をスネル

商会から購入した。しかし、とき既に遅かったと言える。5月1日、白河の戦いで惨敗したことが大きかった。この戦いの軍事総督に容保は戦闘経験のない、今まで塾居させていた元家老西郷頼母を起用した。皆この起用に驚き心配した。容保には再三の西郷頼母の守護職就任反対、就任後も辞退の忠言を聞き入れなかったし、幕府からも裏切られるなど頼母の予想通りであったことも自責の念があったからと推察する。

しかも、この後、頼りにした列藩同盟の各藩は敗戦、離脱が続き、鶴ヶ城に入る関門が次々敗れ、8月23日早朝敵軍が城下に殺到した。逃げ惑う人で、引上げて来た敗兵とでさら大混乱になった。8月23日籠城の知らせる鐘が城下に響き渡った。先の西郷頼母の子女は籠城に迷惑をかけると大家族21人全員自刃したが、家老職の山川大蔵は「皆役に立つ。城に駆けよ」と指示していたらしく、家族全員そのようにした。

ここで、代々高遠藩時代から保科松平家に仕えていた山川家に触れておく。山川兄弟の祖父・山川兵衛は財政を担当する家老で嫡男重固は末子咲子が生まれて亡くなったので、嫁・艶と子供たちを育てた。長女の二葉は重臣梶原平馬と結婚し一子をもうけたが、平馬が

江戸にいる時の女が会津まで追いかけて来たとかで、離婚した。下の子供たちを厳しく指導していた。後に女子高等師範学校の舎監となった。

家督を継いだ嫡男山川大蔵(後の浩)は少年時代から資性英遇闊達、藩内きつての俊才と知られ、会津のエースとして活躍する。山本八重と同歳で子供時代から競い合って淡い恋もあったとか書かれている本もあるが身分が違い過ぎる。21歳の時、幕府の外国奉行の随員としてロシアに約半年行っている。帰って来て半年で鳥羽伏見の戦い勃発で、大砲隊長・林権助は重傷で、大蔵は代わって22歳で隊を預かっている。会津で戦いが始まり、日光方面で後年世話になる副隊長・谷干城率いる土佐兵と一歩も引かぬ戦いをした。しかし会津国境の母成峠が敗れたことにより急遽帰国。しかし会津鶴ヶ城は既に敵の重囲に陥っていたので、浩(大蔵)らは突破するために会津では春の彼岸の訪れを祝う『彼岸獅子』の舞をして通り抜けようとした。新政府軍の兵士も「何だ、何だ」と言っている間に見事入城を果たしたのだ。「知恵の大蔵」と言われた。降伏後は斗南藩の権知事として藩内をまとめ、先の日光口での戦いぶりを評価した土佐藩軍監を勤めた谷は明治6

年浩に陸軍への任官を勧め、西南戦争で陸軍少将にまでなった。陸軍在籍のまま、高等師範学校や高等女子師範学校の校長も勤め、後年貴族院議員に選出される。晩年会津藩の汚名をそぐべく「京都守護職始末」、弟健次郎が後を完成させた「会津戊辰戦史」を編纂した。

三女の操は髪をバツさり切り、鎧をつけて籠城したと言う。後年昭憲皇太后（明治天皇の后）の女官として仕え、フランス語通訳を勤めた才媛だった。

次男の健次郎は泣き虫で、姉たちはそろって気が強く「健次郎、男の癖に何をしていますか」と活を入れられていたと言う。15歳では白虎隊入り出来ず、「早く、早く」と母にせかされて城入りした。健次郎も出撃するも銃撃に肝を冷やし直ぐ戻って来ると、軍事総督となっていた兄浩から「ばか者！何故死んでこなかった」と怒鳴られたと言う。後に、京で「八・一八の政変」（七卿落ち）を仕組み、会津降伏を仕切った秋月悌次郎は長州藩参謀奥平謙輔に家族と猪苗代で謹慎していた健次郎の世話を頼んだ。明治元年の11月には奥平の元へ行く。その後、薩摩藩出の北海道開拓使黒田清隆が募っていた米国留学に明治4年元旦出発し、帰国後東京帝国大学で教授を経て総長にまでなった。

末娘の咲子は籠城時9歳で玉造りや玉配りをして、敗戦後、斗南の生活が11歳の咲子にはかわいそうだと言うことで、兄浩は西郷頼母の息子の世話をした函館の澤辺琢磨（ロシア正教のニコライの一番弟子）を頼った。彼の話をすると長くなるが、坂本竜馬の従兄弟で縁あって箱館の神明社の宮司の跡取りになり、新島襄の脱国の幫助し、神明社の社務所で襄の餞送会をも開いている。その後、ニコライを殺しに行ったところ、説得され、ニコライから洗礼を受ける。山川咲子の話があつたとき、函館在住のフランス人に世話を頼んだ。斗南では、兄浩から藩の指導者として家族にはより厳しい生活を強いられてきた咲子にとって、は函館の生活は別天地と言えた。しかもこの半年後、咲子に明治政府から岩倉使節団と同行する形で留学生派遣の話があり、男子とは別で五人の応募者があり、中に津田梅子もいた。尊皇攘夷運動の火が消えて数年も経っていないのに、11歳の女の子を遠い異国で勉強させるとは、どの家族も考えられなかっただろう。母艶は「捨てた積もりで待つ」と言う意味で「捨松」と咲子を改名させた。

在米中の新島襄に使節団の通訳の話があり、襄は何

回も使節団と会っている。多分捨松にも会っているだろう。9歳の梅子は友人の津田仙の娘と言うことでもあり再三会っている。10年の留学を終え帰国した捨松に陸軍大臣の大山巖は結婚を申し込んだ。大山巖は会津藩攻撃時大砲隊長として小田山から鶴ヶ城へ向けて砲撃した敵将である。兄浩はこの結婚には、初めは妻登勢がその砲撃で爆死したこともあって反対したが、本人が承諾したこともあり、最終的に認めた。美貌と知性を併せ持ち、鹿鳴館時代の社交界において「鹿鳴館の華」と称えられたが、各種支援のためのチャリティバザーであつたことは余り知られていない。八重が貢献することになる日赤篤志看護婦人会は捨松が発足させたものである。日清、日露戦争時のこの会を通じての支援は米国留学時代世話になったニューヘブンの人々にまで広がっていたのである。津田梅子が女子英学塾（後の津田塾女子大学）を設立すると病気になるまで支援した。

一つの家からこれほど多くの優れた人材が育った最大の理由は家庭教育、母艶の教育の賜物であつと思う。その根本は毎晩二時間前後の心を込めた読み聞かせだという。健次郎の話では、艶は奉公人にも教育を

したとのことである。これは家庭用に配布した「幼年者心得之廉書」と言われるものを解いたのではない。日新館で「日新館童子訓」を男子には教えていたがこれを平易にしたものである。しかも子女には家庭で教えていた。山川兄弟の母親艶の教育の話だけでなく、会津藩藩士の家庭教育全般にも言えるのではない。 「ならぬことはならぬ」と唱えた「什の掟」は6歳から9歳までの藩士の師弟約十人から成り立つ組にて掟として子供たちで唱えさしたのである。八重は「日新館童子訓」を父親から習ったらしく、80歳以上になっても覚えていたことを披露していた。これらの教育制度が、一人の脱落者も出さなかったことに繋がり、この結束力が多くの死傷者を出したことは否めないが、美しく感じるのは私一人だろうか。

籠城戦に話を戻そう。八重は「籠城の通知の半鐘がなると『私は弟の敵を取らねばならない、私は三郎だ』と言う心持ちで、その形見の装束を着て、一は主君のため、一は弟のため、命ある限り戦うと決心で入城したのです」と回顧談で語っている。また「中野孝子と言う薙刀の先生が『あなたがどうして私どもの組に入りにならと思つて卑怯者のように思いましたが、ど

うしても鉄砲の中では薙刀では行きません。ようやくと自分の娘（22歳中野竹子）が討死してから悟りました。私の（下の）娘（16歳中野優子）にも教えて欲しい」と言われました。優子が姉竹子の首を敵に持って帰らせないと介錯し抱えていたと言う。この中野母子には凄いの話が残っている。入城する前「優子もし敵の慰み者になるなら恥辱だからいつそのこと今夜殺してしまおう」と相談していたと言うのだ。これらの話から武士、武家の作法の厳しさを痛感するし、覚悟も心構えも尋常ではない。

この8月には山本家に砲術修業に訪れていた内藤新一郎ら米沢藩士がいた。当然川崎尚之助を慕ってお教えを請うに來たのだ。その報告が残っている。「23日未明に半鐘響き渡り、城内へ走り行く。市中兵火見ゆるに付き、暫時様子を探らんと家中徘徊する中、忽ち四面一円黒煙となり、銃丸飛び來ること雨の如し。遁れる道なく城内に戻る外なきところ、是非此の形勢を米沢に報告せんと、二人道を異にし：後を顧しは最早城下一体兵火となる。敵は逃げるものは一切構わず、只城に向かって砲発するのみ……」

容保が敵陣から間断なく撃ち込まれる砲弾につい

た婦人方が、何れも飢渴を忍び、勞を厭わず、何事も真先に働かれたことだ。」と回顧している。西洋で言う「ノブレス・オブリージュ」(noblesse oblige)は幕末の日本でも女子の間でも実践されていたのだ。他の例を挙げると、戦いが激しくなると包帯も事欠くようになり、十分に薬が行き渡らず命を落とすものが相次いだ。容保の義姉に当たる照姫は「この帯を解いて、帯芯を包帯の代わりにしましょう」と、高価な帯や着物惜しげもなく提供したと言う。

この照姫について簡単に説明する。上総・飯野藩から8歳のとき子供のなかつた8代会津藩主松平容敬の養女となる。後に2歳年下の容保が養子として迎えられる。照姫は10代にして書道、茶道、礼法、香道に通じ、特に和歌や琴を好んだ。容保にも和歌の手ほどきをするなど、献身的に義弟容保の世話をした。夫婦になる予定だったと推定するが、養父容敬に子供敏姫が出來、18歳のとき豊前・中津藩に嫁いだ。しかし23歳で離縁。会津藩に戻り、容保を陰ながら支える。後の籠城戦では女士の士気を高めた。筆者の勝手な想像だが、照姫が容保をお側で支えたいということから、照姫を護衛するために薙刀の先生中野孝子が薙刀で女

て八重に「今の弾丸の大きさは？」と尋ねた。このとき容保の小姓15歳の井深梶之助（後の明治学院2代目総理）はその場面を目撃し記述している。要約すると「妙齡の女丈夫が着発しない（ように水に濡らした）砲弾を抱え、これを（御前で）分解し、数多の鉄片を取り出し流暢に説明し四座を驚かした。誰であろう。当時23歳、現在米寿を迎えられた新島八重子女史である」

17歳の山川操は鎧を脱ぎ捨て、下は黒羽二重の紋付姿で弾丸をこしらえ、握り飯をこしらえたりして、負傷兵の看護に走り回っているうちに、着たきりの裾はすっかり汚れ擦り切れ、旧暦9月に入ると寒さが堪えたときを回想している。長崎で西洋医学を学んだ將軍家持の侍医も勤めた松本良順が門弟四人を連れて救護に駆け付け負傷者の手当てにあたつたので、牛乳の摂取など当時としては進んだ治療が行われた。包帯の巻き方、救助の仕方など西洋の看護を目の前で教えられ実践してきたので、八重や捨松および後年特に「日本のナイチンゲール」と称され、藍綬褒章を受章した瓜生岩子に籠城での経験が役に立ったと思えてならない。八重は「特に感心したのは、高禄を食んで居られ

娘隊を結成したと思う。

入城した婦女子は六百名で総指揮を執つたのが照姫なのだ。照姫の指示により疾病者の看護、兵糧の握飯や銃弾作りが行われた。八重は、昼はこの隊と一緒に行動し、夜は男装しスパンサー銃を持って出て行っていたのである。八重は言っている。「女の命である黒髪は戦の邪魔になるが意外と切り難い。裁縫を習っている高木家の娘である時尾（後の斉藤一夫人）に切揃えて貰った。是非一度進撃したいと思つて、『決して婦人として見破られないようにするから』と言つても、許されず。夜分なら分らないと勝手に解釈して夜襲に時々出て行っていた。八重の武勇談を読んでいると夜だけではなさそうである。婦人ゆえに戦いの持ち場はない。自分で作るしかなく、見回したところ緩そうな石垣を見つけ、力任せにこれを蹴落とした。」と言う。堀に水がなくなると今でも八重が蹴落としたと言われる岩が見えると言う。「そこに開いた空間へ早速スパンサー銃を構え、照準を合わせて狙撃した。」有効射程200mから700mに一挙に拡大したのだ。この状況に新政府軍も驚愕したと言う。また、この弾が後で山川捨松の夫になる新政府軍の砲兵隊長である大山巖の大腿

部に当たったと言われている。会津藩が持つ銃では射程距離外だったからだ。

「城中はまるで濛々たる硝煙で、殆ど咽ぶような有様、しかし誰一人躊躇うものもなく、むしろ勇気百倍、子供らは濡れ鎧を持って縦横に馳せ回って、焼玉を消している。婦人は弾薬の補充に奔走し、或いは負傷者の運搬救護等、その多困多難の有様、なんとも話になりません。私も暇を見て有賀千代子さんと共に握飯を盆に盛り、大書院、小書院の病室へ運搬中、轟然一発脚下に破裂し、砂塵濛々として目も開けられず。呼吸も出来ず、暫時佇み、漸く目を拭うて、見れば千代子さんが煙の内に立っているが、其の顔は土人形の怪物そっくり、これには私もおかしく抱腹絶倒しました。千代さんも私の顔を指差して笑いこけていました」なんとも女性強く明るい。籠城の話は尽きないが、尚之助の奮闘を語らなかった。この証言で終わりにする。

尚之助自身の記述はないが、残っていたのである八重の幼馴染高木年尾の弟 高木盛之輔（当時15歳、明治になって各地の地方裁判所検事を歴任後、福島市に閉居）が中軍護衛隊で守っていた豊岡口の砲台で、尚之助は教える立場であるが実践の経験はなかったの

で、最後の2発になったとき、護衛隊の少年に向かって、尚之助が述べたのを聞いていたのだ。明治元年9月14日のことである。

「我が軍は天守閣を的に揚げあるに、彼らの弾は命中するに能わず。余、一発を間違はなく小田山の砲置に加え、必ず命中せしむべし。」と言って二発とも見事命中した。少年たちの中に「薩賊長奸！」と叫んで絶叫する者がいた。この見事な砲撃でもって会津藩は小田山を攻撃する術を全て失った。この一週間後、会津藩は降伏した。敵だけでなく城外にいる者にも知らせなくてはならないので、三本の白旗を作る必要があった。白い布は全て包帯に使われたので、端切れを集めて悔し涙で濡らしながら縫い合わせたと言う。

その夜、八重は三の丸の雑物庫の壁に簪で刻んだ和歌を残している。「明日の夜は何国の誰か 眺むらん なれし御城に残す月影」

翌朝、新政府から握飯が配られ、八重はそれが白く輝き過ぎて、毒でも入っているのかと躊躇したが、美味しかったと素直に語っている。籠城中は玄米しか食べていなかったからだろう。

（前編 終わり・さう 後篇）



山本八重時代（戊辰戦争 八重 籠城に際して入場時の袴姿を、新島八重になってからの1901年（明治34年）頃に撮影

同志社社史資料センター提供